

ほとけの混和会だより

平成二十七年十月

東光院

仏の混和会

第115号

ノーベル賞 受賞おめでとう 御座います。



大村智さん



梶田隆章さん

十月五日と六日、ノーベル賞の受賞者が発表されました。医学生理学賞に、大村智さん。物理学賞に、梶田隆章さん。

その二人のお言葉がすばらしく、生きる指針として、また人としての真の心を語っているように思えましたのでここに紹介させていただきます。

大村智さんは、

「私の仕事は微生物の力を借りているだけ。私自身が偉いものと考えたり難しいことをやったのではなく、全て微生物がやっている仕事を勉強させていただいて居るだけです。そういう意味で私がこのような賞を頂いていいのか」と謙虚に語っておられました。

これは大自然の懐に抱かれ、大自然の営みと導きによって、私達は生かされていると言う「ブッダ」の教えに共通するものがあるのではと考えさせられてしまいました。

そして、現代の競争社会において私達が忘れて居た心を目覚めさせてくれた言葉が、大村さんの祖母の教えかと思えます。

大村さんの祖母は、何時も「人のためになることをしなさい」と言われ続けたそうです。そして判断の分かれ道に立った時は、その言葉を基準に物事を行ってきた。とのことでした。

この言葉も、最澄様のお言葉

「己を忘れて他を利用するは慈悲の極みなり」に通じるものと思われます。ただひたすら人々の為に、と生きていく。このような生き方は、なかなか出来るものではありませんが、少しでも大村さんの生き方に近づくと御座います。

そして梶田さんは、「人のまねをするところまで終わりなんです。それを超えることは絶対あり得ない。」「成功した人はあまり失敗のことをいわないけれど3倍も失敗している。」などと言っておられました。

この度の受賞者のお言葉を真摯に受け止めて、私自身も人のまねをして生きるのではなく、他と比べない、あるがままの真の自分を見いだし、又失敗を恐れず、ただひたすらに人々の為に、と生きて行かれたら、真の幸が得られるような思いでした。

発菩提心

私達は仏陀の教えから様々な迷い、苦しみを克服し、真の幸、又生きることに意義を見いだす事を目的に仏道を精進致します。

その、己の迷いを克服し真の幸を会得する教えが「発菩提心」で有ります。

仏教の言葉はインドの言葉が音写されていて、とても解りにくいのですが、菩提とはボーデー(Bodhi)の音写で「覚者とか目覚めた人」という意味で、発菩提心とは、「覚者」いわゆる仏陀の心、仏心、慈愛心を発すると言うことです。この菩提心に目覚めた人を菩薩と言ひ、観世音菩薩とか地藏菩薩と言つております。と言つても特別な存在では無く、私達も菩提心を抱く事が出来れば、私達がこの世に於いて御仏の慈悲心を伝える観世音菩薩と成り、地藏菩薩となるのです。

ちよつと解りにくい説明ですが、私達が菩提心の元に、慈悲心を抱き人々に情けをかける事が出来れば、「あの人は観音様のような人だね」とか、地獄の苦しみを得ている極悪人に慈悲の手をさしのべれば地蔵尊となり、人々より感謝の念を抱かれるものと思ひます。

と言つても人々の感謝を求めて恩着せがましく人々に慈悲の手をさしのべても、それは菩提心とは言いません。そのような見返りを求めた慈悲心は災いの元となりますので、むしろしない方が良いでしょう。

菩提心を起こすと言うことは、たとえ自分が救われずとも、人々が安心に満たされる境地「彼岸」に至れますようにと、己の悟りより他の人の悟りを願ひ、他の幸を喜びとする心こそ菩提心に有ります。そのような菩提心に目覚めた時、知らず知らずの内に、苦しみの境地を出でて大きな安心に抱かれ、真の幸や生きることの意義、又命を伝える事の喜びに満たされていきます。

このように説明すると「菩提心」は善人だけのものと思われがちですが、悪人で有つても菩提心を抱く事が出来ます。どのような境遇に合つても、菩提心に目覚めれば、苦しみの境地より救われるのです。善人であれ悪人であれ、或いは裕福にあつても貧困にあつても、どんな境遇にあつても「菩提心」を持つことに一切の資格も制限も有りません。この仏陀の御教え、「菩提心」は己と共に人々を救済する妙薬なのです。

先ず、己の自我を少しづつ減して、他の幸を念じる処から努めて参りたいと思ひます。

この度受賞された大村さんの生き方、熱帯地方の風土病に苦しむ人々を救いたいと言う思い、当に菩薩としての生き方そのものかと思ひます。

又梶田さんの「人のまねをしない」と言うお言葉も、菩薩としての生き方は人それぞれ、他と比べる事無く、己の器に合った菩薩行を行じる。と受け止めて、努めて行きたいと存じます。合掌 亮観拝

日本の仏様

No.5



今号では四つの階層に分けられた仏の四番目に位置づけられた「天部」について紹介します。「天」とは一言で言うと、仏教に取り込まれたインドや中国の神々を指します。仏の各部類において最も種類が多く、多数の仏がここに所属しています。

四、天部

仏教の開祖、お釈迦様が説かれた教えを仏教という形に形成する際、インドにて信仰されていたバラモン教やヒンドゥー教などの神々を仏教の教えを守る守護神として取り入れられたとされています。中にはインドの悪魔が仏教の教えによって改心し、守護神とされた神様もいます。天における外見は大きく五種類に分類できます。

一、中国風の貴人の姿で、穏やかな表情。梵天や帝釈天など。
二、中国風の貴婦人。吉祥天や弁財天など。

三、皮革製の鎧を身に着け、忿怒の形相をした武人。四天王や韋駄天など。

四、髪を逆立てた怪奇な鬼。上半身は裸で腰から短めの袴を着けるものが多い。深沙大将や風雷神など。
五、頭部が動物で身体は人。迦楼羅や歓喜天など。

この様に、様々な宗教の神様が仏教

における「天」という存在になったため、その性格や容姿は多彩で、バリエーションも豊かになっています。ここでいくつかの天について紹介します。

● 梵天 悟りを開いたお釈迦様は教えを説くことを迷っていました。そこでいくつもの天について紹介しました。● 閻魔(閻魔天) 古代インドの神話によると、かつて人間は永遠の命を授けていました。しかし、罪業を重ねるようになり、寿命に限りが出てきて、最初に死んだ者が閻魔となったと言われています。後に仏教に吸収され、閻魔天と呼ばれるようになり、民間に広まるうちに、冥界を支配する死者を裁く王となりました。

このように有名な仏教の神様も実は他の宗教の神様であったというようにことが多々あります。名前に〇〇天と付く仏教の神様を見かけた場合、もしかしたらその神様も元は別の神様だったのかも知れませんよ。続



京都府東寺 天座像 亮澄拝

法華大会に 行って参りました

比叡山延暦寺では、五年に一度開かれる盛大な法華法要、「法華大会(ほつくだいえ)」が十月一日より六日間に渡り厳修されました。

そもそも論議法要とは、法華經をはじめ天台教学上の講義や問答を中心とした法要であり、古くは平安時代より、勅使を迎え行われてきました。

現在では内容の簡略化が見られるものの、その形式や所作等々は古儀に習い、伝統的な儀式として天台宗では大変重要視されております。



日程中、午前中は已講と呼ばれる高僧が天台教学について講義をする法華十講という儀式が行われ、午後から深夜にかけては、全国から集まった二三名の若手の僧侶(堅者とよばれる)が、天台宗最高の学匠である探題大僧正をはじめとした高僧たちを

相手に、教学上の問答試験を行う広学堅義という儀式が執り行われます。

堅義中、会場となる大講堂は暗幕が張られ、頼りになる明かりは灯明の照らす僅かな光のみとなります。薄暗く厳かな堂内には探題大僧正のほか、問者や会行事、注記など様々な役職の僧侶や高僧が詰めており、その中に堅者は一人飛び込み、所定の所作に従い論議を頂き、通常は一生に一度きりとなる高座に上ります。その後、古来よりの独特の節回しに合わせ表白を唱え、問者達と問答をしていくのです。



そして今回の大会には兄弟ともに参加させて頂き、大変貴重な経験をさせて頂きました。

そばの花が咲きました

しかし、今年 は初期の天候不順等により、残念ながら不作となつてしまいました。 亮敬拝

